



# エコ・ファーストの約束

ー環境先進企業としての地球環境保全の取り組みー

環境大臣 中川 雅治 殿

平成 30 年 8 月 7 日

清水建設株式会社  
取締役社長 井上和幸

清水建設株式会社は、低炭素化・資源循環・生物多様性確保に関する最先端の環境技術を独自に開発し、施設建設やインフラ構築などの社会資本の整備を通じて、豊かで持続可能な社会の実現に貢献すべく、建設企業の環境リーディングカンパニーとして、以下の取り組みを進めてまいります。

## 1. 最先端の建物省エネ技術の開発・実践を通じた低炭素社会実現への貢献

### ■ 全社 CO<sub>2</sub> 削減活動 ( エコロジー・ミッション ) を推進します。

- 都心超高層 ZEB Ready Building や PEB ( Positive Energy Building ) の実現によって得られた知見を活かし、建物単体の更なる省エネ性能の向上を推進します。
- 既存市街地でのエリアエネルギーマネジメントの実績を活かし、スマートコミュニティさらにはスマートシティ実現への先駆的プロジェクトに取組み、膨大な既存建物ストックの大幅な省エネ化を推進します。
- 上記建物単体及び既存エリアの省エネ化により、設計施工案件の運用時 CO<sub>2</sub> 排出量を 1990 年度比、2030 年度 60%、2050 年度 80%削減します。
- 構工法の開発やグリーン調達を推進すると共に、建設作業所で使用する重機・車両・機器の低燃費化を促進し、施工時の発生 CO<sub>2</sub> を 1990 年度比、2030 年度 60%、2050 年度 80%削減します。
- LED 照明や高効率空調機器の採用により、自社オフィス ( 本・支店・営業所 ) から発生する CO<sub>2</sub> を 1990 年度比、2030 年度 56%、2050 年度 80%削減します。さらに、当社が創出するカーボンプレジットによりオフセットを行い、自社オフィスのカーボンゼロを推進します。

## 2. 自社開発の建設副産物管理システムによる資源循環社会の実現への貢献

### ■ 全現場一元管理の副産物削減システムにより、3R を推進します。

- 省資源 [ Reduce ] 現場固有の多様な削減計画を立案実施する「建設副産物予測システム」を実施し、建設副産物発生原単位を 2030 年度に 15.0kg/m<sup>2</sup> 以下に抑制します。
- 資源循環 [ Reuse, Recycle ] ゼロエミッションプロジェクトなど建設時の廃棄物の徹底分別により混合廃棄物の削減を図り、建設副産物の最終処分率を 2030 年度に 3.0%以下に抑制します。

## 3. 自社開発の生態系保全システム等による生物多様性確保の実現への貢献

### ■ 生態系評価ツールにより、都市部の生態系保全・回復を推進します。

- 開発の進む都市部において、生態系保全に留まらず、より積極的な再生促進を目的とし、周辺地域の生態系特性を考慮した敷地内土地利用や面開発ランドスケープの最適解を抽出します。
- 当社技術研究所内に 2006 年に設置した都市型の大規模ビオトープ「再生の杜」では、10 年間で植物種数、魚類総数が大幅に増加するなど、生物生息環境が着実に向上しています。継続的または新規誘致種として鳥類のカワセミとカルガモ、チョウ類のジャコウアゲハとコムラサキ、トンボ類ではホソミオツネトンボ、リスアカネを目標種と定め、適切な維持管理と定期的モニタリングにより、2030 年までの誘致を目指します。
- これらの案件で培った、生息シミュレーション・計画・建設技術や維持管理のノウハウを、今後の数多くの実案件に展開すると共に、官・学との共同連携を強化して、より多面的・広域的な生態系保全に貢献します。
- 当社の最先端技術を紹介する社会人・青少年向けの常設公開講座「シミズ・オープン・アカデミー ( SOA )」は、2008 ~ 2018 年に 5 万人の受講者を迎えました。このうち「再生の杜」の見学者は、21,024 人にのぼり 2030 年までに 50,000 人達成を目指します。生態系のみならず温暖化防止や資源循環など環境に関する教育を「持続可能な開発のための教育 ( ESD )」として今後も継続し、サステナブルな社会の実現に貢献します。

清水建設株式会社は、上記取組みの進捗状況を確認し、環境省へ報告するとともに、コーポレートレポートおよびホームページによる公表を行って参ります。

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION  
清水建設